



特集号・巻頭言

「鉄と鋼」第100巻記念特集号発刊にあたって

Foreword for the Commemorative 100th Issue of the Tetsu-to-Hagané

論文誌編集委員会 委員長 江阪久雄
会報委員会 委員長 森田一樹

大正4年(1915年)3月、まさに日本鉄鋼協会の発足と同時にスタートしました「鉄と鋼」ですが、時代の変化と共にたくみにその姿と性格を変化させて生き残ってきました。途中、関東大震災による欠号、終戦の年の欠巻はありますが、一歩ずつその歴史を歩み続け、今年をもって、記念すべき100巻に到達しました。第1巻・第1号は東京帝国大学工科大学長の渡邊 渡先生の祝辞から始まっています。まさに鉄は国家なりの時代でした。100年後の今、鉄鋼は多くの材料のひとつになり、産業全体の中に占めるその相対的な位置づけは低下したように見えます。しかし、100年にわたり鉄鋼材料は社会基盤材料としての位置づけを堅持し続け、逆にその重要性をますます高めてきたと言えます。日本鉄鋼協会は日本鉄鋼業のまさに創成期から発展期へ、そして成熟期への変化と共に歩んできました。日本鉄鋼協会の『顔』である「鉄と鋼」は100年の長きにわたり情報を発信し続けてきたということであり、諸先輩方のためめぬ努力に敬意を表します。

「ふえらむ」は平成8年(1996年)に会報誌として特化し、「鉄と鋼」と分離しました。再度、平成20年(2008年)に「鉄と鋼」と合本となりましたが、その性格は変わらず、会報誌としての性格を維持してきました。今回、「鉄と鋼」の第100巻記念特集に際し、「ふえらむ」の記事誌面で「鉄と鋼」の特集を企画することとし、論文誌編集委員会の下に設置された「鉄と鋼」第100巻特命小委員会に会報委員会からも委員を投入し、合同で企画・編集をいたしました。

特命小委員会では、論文も含めた総合学術誌としての「鉄と鋼」を復活させたいと考え、「ふえらむ」の紙面を大きく使用する形で、記事構成を検討しました。

2014年1号(今号)の「ふえらむ」記事構成は、まず、巻頭グラフ記事として「論文誌の歴代編集委員長による座談会」を企画しました。最近の論文誌編集委員長に集まってお話し、主として今後の「鉄と鋼」のあり方について議論しました。日本鉄鋼協会の『顔』としての、日本語の論文誌である「鉄と鋼」は、形はたとえ変わっても、日本に鉄鋼業が存続する限り、継続すべきとの結論にいたっています。

また、「鉄と鋼と私」では、産学の若手、重鎮の方々に、「鉄と鋼」とどのようにかかわってきたか、また今後どのように期待するかなどについて、随筆を寄稿していただきました。一口に日本鉄鋼協会会員と言っても、分野も違えば立場も違います。協会とのかかわりは違っていても、共通部分はやはり「鉄と鋼」であり「ふえらむ」であるように思われます。これらは会員の共有できる空間であり、『同志の意識』を作る土壌の役目を担っていると考えられます。これは形や媒体が変わったとしても、協会として今後とも提供していく義務があると考えられます。

さらに、論文誌の変遷エピソード、表紙の変遷、100年分の鉄鋼生産技術年表などの記事を掲載しています。

今号におけるこれらの記事により、我が国の鉄鋼業や「鉄と鋼」にまつわる、100年の流れを感じていただけることを願っております。

「鉄と鋼」の2号以降は技術分野の特集号であり、2号：製鉄、4号：製鋼、6号：環境、7号：分析、9号：材料1、10号：材料2、12号：圧延・加工、の各分野です。各号の「ふえらむ」の巻頭グラフ記事もその技術分野に連動する形式を取り、各技術分野の過去を振り返りつつ、今後を占う座談会を企画しています(10号は計測制御システム技術の座談会の予定です)。同様に連動形式を取るのが、「エポックを作った人物紹介」です。100年の歴史の各技術分野の中でエポックを作った人を選定し、その人や技術にかかわるエピソードの紹介をお願いしました。

一年間にわたって楽しんで読んでいただき、我が国鉄鋼業の将来に思いをはせていただくようお願いします。